

複合メディア環境における 「メディア・イベント」概念の射程 —〈仮設文化〉の人類学に向けて—

飯田 豊ⁱ, 立石 祥子ⁱⁱ

スクリーンに媒介されたイベント——パブリック・ビューイングやライブ・ビューイングなどの集団視聴、あるいは大規模なオンライン視聴をとまなうイベント——が人口に膾炙している。本稿では、こうした文化現象の社会的機能を捉えるために、「メディア・イベント」概念の理論的射程を再検討することを目的とする。まず、日本におけるメディア・イベント研究の展開を跡付けると、歴史分析に厚みがある反面、国際化と情報化にとまなう今日の変容を分析しようとする機運は低調である。しかも今日では、インターネットやモバイルメディアの普及にとまなう、複合メディア環境の特性を踏まえた理解が不可欠である。また、大衆を動員する手段としてメディア・イベントを捉える事例研究は豊富だが、たとえ受け手の主体性や能動性のあり方をいかに精緻に読み解いても、権力的作用の度合いに焦点化している限り、結局は〈動員／抵抗〉の二項対立に回収されてしまう。そこで、文化人類学における議論を補助線に、〈動員／抵抗〉という一元的な尺度とは異なる視角から、メディア・イベント研究の理論的再構築の道筋を示した。すなわち、〈真正さの水準〉という尺度を手放さず、参加者同士の水平性を注視することで、特定の嗜好性に支えられた集団の実践として境界付けるのではなく、逆に境界を曖昧化させる出来事として捉え直す余地を残しておくことが重要であることを論じた。メディア・イベントが受容されるのは、常設された受像機や常時携帯された端末を取り巻く日常的な視聴空間とは限らず、仮設のスクリーンに媒介された、より短命な出来事（＝仮設文化）でありうる。そこで最後に、おぼろげな出来事を体験した人びとの、かたちな現実を読み取っていくための方法論のひとつとして、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）」を用いた分析の有効性を示した。

キーワード：メディア・イベント、パブリック・ビューイング、テレビ、仮設文化、文化人類学

1. 緒論

1.1 ネットに媒介される「街頭テレビ」

「若者のテレビ離れ」と言われて久しい。若年層

の視聴時間が減少傾向にあることに加えて、ネット動画視聴の浸透などにとまなない、テレビ受像機に対する意識が希薄化しているという面もある。「テレビ」は長年、「放送」あるいは「マス・コミュニケーション」という概念と密接に結びついていた。装置の次元においては半世紀にわたって、ブラウン管によって電気信号から画像を再現する受像機のことを意味してきた。しかし21世紀に入ると、地上波放送

i 立命館大学産業社会学部准教授

ii 名古屋大学大学院国際言語文化研究科学術研究員

のデジタル化にともなって、ブラウン管はあっという間に私たちの日常生活から姿を消し、薄型のスクリーンが急速に普及した。屋外では都市の街頭から電車の車両内まで、いたるところにスクリーンが配備され、映像情報が遍在している。また、スマートフォンやタブレットなどの携帯端末によって、手のひらの上で映像を扱うことが当たり前になった。こうして端末が複数化する中で、「視聴者 (audience)」という概念も自明性を失いつつある。

たとえば近年、駅前広場や特設会場などで主としてスポーツ中継を観戦する「パブリック・ビューイング」が、世界各地で人気を博している。特にサッカーワールドカップ (以下、W杯) の場合、各地のスタジアムやスポーツ・カフェで、もともと無料で視聴できるはずのテレビ中継を、有料で集団視聴するという観戦イベントも頻繁に開催されている。リビングにおける家族同士よりも密着して、試合の動向に一喜一憂し、感動を共有する。家庭内視聴では決して味わえない身体感覚は、しばしばテレビ草創期における「街頭テレビ」の熱狂に喩えられる。ただし現在では、テレビ中継が会場の巨大スクリーンで視聴されるのみならず、手のひらのスマートフォンでも同時に情報が収集され、ソーシャルメディア等を通じて声援や野次が拡散していく。

スクリーンに媒介されたイベントを構成するのは、放送局が中継する番組ばかりではない。音楽や舞台などの公演中継を、映画館やライブハウスのスクリーンで鑑賞する「ライブ・ビューイング」も、ここ数年で市場規模が急速に拡大している¹⁾。高品質の映像・音響設備によって、会場の雰囲気が生々しく再現できるようになった。コンサートの場合、アーティストは目の前の観客のみならず、遠隔地のスクリーンを介して鑑賞している観客にも呼びかけ、各地の会場を同時に盛り上げる。

かたやネット上では、放送中の番組に対する反応が、ソーシャルメディア等を介して実況されている。放送局や大企業によるオンデマンド配信も充実しているが、Ustream やニコニコ生放送などのプラット

フォームを利用すれば、誰でも手軽に雑談放送をおこなうことができる。「弹幕」と呼ばれるコメントを通じて参加者同士が盛り上がる雑談放送について、ジャーナリストの津田大介は次のように発言している。

あの楽しさって、1950年ぐらいにあった街頭テレビの楽しさだと思うんですね。力道山のプロレスを見て、みんなで盛り上がるみたいな、ああいうなんか一体感っていうのが、テレビの原点だったと思うんですけど、[...]それがインターネット放送の双方向性みたいなものが登場したことで、ある種、テレビが原点的な存在に、楽しさというのを獲得しつつあるのかなっていうふうに僕は思ってますね²⁾。

2012年から毎年4月、株式会社ダウンゴが幕張メッセで開催している「ニコニコ超会議」のように、大規模なオンライン視聴を前提に企画されるイベントもある。会場に遍在する無数のスクリーン、あるいは手元のPCやスマートフォンを介して、ネット視聴者とともにイベントを楽しむ。2014年は大相撲や将棋対局のネット中継が注目を集め、『朝日新聞』はこれを次のように報じている。

将棋の羽生善治三冠はかつてニコ動の生中継を、緑台将棋にたとえた。ニワゴの杉本社長は今回の相撲を「街頭テレビ中継のよう」と話す。「みなで集まり、声の大きい人の発言を聞きながら、よく知らない人が魅力に目覚めていく。古ければいいというものではありませんが、そんな伝統文化はほかにもあるはずですよ³⁾。

ここでも「街頭テレビ」という比喻によって示唆されているように、ネットに媒介された新しい映像文化は、テレビ受像機が家庭に普及する過程で失われた集団視聴という現象を擬似的に再生しているという一面がある。

1.2 スクリーンに媒介された集団の雑種性、複数性をいかに捉えるか

日本にパブリック・ビューイングが定着したのは2002年の日韓共催 W 杯にまで遡るが、こうした集合的沸騰に対して、批判的な言説も存在する。精神科医の香山リカが当時、路上などで無邪気に国旗を振る日本の若者たちを「ぶちナショナリズム症候群」と評した（香山 2002）ことは、特に大きく話題になった。その一方、ニコニコ超会議に表出する右傾化傾向が海外で厳しく非難されたこともある⁴⁾。こうした批判の妥当性を検証するためには、複合的なメディア環境のもとで成立するイベントの社会的機能を、実証的に捉えていく必要がある。

2006年のドイツ W 杯においても、ドイツ国内では大規模なパブリック・ビューイングが開かれた。特に大きな注目を集めたのが、ベルリンの「ファンマイル (Fanmeile)」——「ファンのための数マイルの道」の意——である。このイベントでは、試合を観戦するためのスクリーンが仮設されているだけでなく、ステージ上では音楽フェスティバルが催され、露店が立ち並ぶ路上では、ダンスや小競り合いが繰り広げられた。国外からの観光客を見込んだ FIFA の公式イベントだったが、蓋を開けてみると多くのドイツ人——しかも若者だけでなく高齢者までも——が、国旗を振る光景が見られた。第二次世界大戦後、公的空間で国旗を振るという行為が制馭されてきたのは、日本と同じである。参加者が文字通り、熱狂的なサッカーファンだったとは限らない。さほど試合内容に関心を向けることなく、流行のパーティを楽しむために会場を訪れた人びとも数多く存在していたのである。

このような傾向は、日本で90年代後半以降、夏の風物詩として定着した野外ロック・フェスティバル（夏フェス）と通底している。通常のコンサートやライブとは異なり、フェスの来場者は経験を積むほど、必ずしもステージ上の音楽には執着しなくなり、現在では幅広い世代の人びとが、思い思いに会場の雰囲気を楽しむようになっている⁵⁾。

特定の音楽趣味を共有した集団としてフェスの参加者を分析することが不可能であるように、パブリック・ビューイングの参加者に対しても、それが特定の指向性を持った集団——熱狂的なサッカーファンもしくは感情的な愛国主義者——であることを自明の前提とした分析には限界がある。ネットに媒介された集団視聴に関しても、その規模が大きくなるにつれて、あらかじめ特定の趣味が共有されているとは言いがたくなっていく。言い換えれば、スクリーンに媒介された集団の雑種性や複数性をこそを直視しなければならない。

1.3 「メディア・イベント」概念の再検討

ダニエル・ダヤーンとエリユ・カツは1992年、マスメディアに媒介された世俗的儀礼の演出と受容に焦点を当てた議論の伝統を踏まえて、『メディア・イベント—歴史をつくるメディア・セレモニー (Media Events: The Live Broadcasting of History)』を著した。彼らが特に注目したのは、通常のテレビ放送の編成が変更され、特別枠で伝えられるイベントである (Dayan and Katz 1992=96)。この意味において、オリンピックや W 杯などのテレビ中継はこれまで、典型的なメディア・イベントとして捉えられてきた。パブリック・ビューイングはその新しい受容形態として注目を集めているが、考察の余地を多分に残している。テレビ放送の受容に関してはこれまで、あくまでも家庭内視聴が前提とされてきたのに対して、パブリック・ビューイングは、参加者（視聴者）の能動的関与によって、メディア・イベントとしての放送が再イベント化されるという特質があるためである。それに加えて、インターネットやモバイルメディアの普及にともない、テレビの視聴者を取りまく情報メディア環境が重層化している中で、メディア・イベントにいかなる質の変容が生じているのだろうか。

メディア・イベントとは元来、マスメディアの社会的機能を示す概念のひとつだったが、冒頭で述べたように、「テレビ」や「放送」、「視聴者」といった

概念が軒並み自明性を失っている現在、電波を介して〈放送されている／いない〉という差異は、果たしてどこまで重要だろうか。裏を返せば、イベントを媒介する事業主体が〈マスメディアである／ない〉という同定も、次第に困難になっている。2020年の東京オリンピックを引き合いに出すまでもなく、ネットに媒介されたイベント中継は、今後ますます大規模化していこう。そしてその受容体験は、ネット上で日々、日常的に実践されている擬似的な集団視聴と切り離して考えることはできない。既に述べたように、パブリック・ビューイングに対しても使われる「街頭テレビ」という比喩、そして批判的言説の近接性も看過できない。

ところで、ダヤーンとカツのメディア・イベント研究が、日常の時間の流れから切断された次元に成立する、全国あるいは全世界の関心が集まるようなイベントに焦点を絞っていたのに対して、日本ではどちらかといえば、新聞社や放送局の事業活動を念頭に、もっと規模の小さな、日常との境界が曖昧なイベントに対して、強い研究関心が向けられてきた。さらにネットの媒介作用まで視野に入れた場合、メディア・イベント研究がこれまで蓄積してきた知見は、今後いかに継承できるだろうか。こうした問題意識にもとづいて、いま一度、その理論的射程を検討するのが本稿の目的である。

そこで本稿ではまず、メディア・イベント研究の系譜について、日本における展開を中心に跡付ける(→2章)。結論を先取りすれば、日本のメディア・イベント研究は、歴史分析に厚みがある反面、国際化と情報化にともなう今日の変容を分析する機運は低調であると言わざるをえない。また、大衆動員の手段としてメディア・イベントを捉える事例研究は枚挙に暇がなく、逆にそうした権力的作用に対する抵抗の契機を見出そうとする視座も広く共有されている。しかし本稿では、文化人類学における議論を補助線に、この二分法とは異なる尺度から、理論的再構築の道筋を検討する(→3章)。また、メディア・イベントが受容される空間を記述する方法論も、

これまで十分に精練されていない。メディア・イベントが受容されるのは、常設された受信機や常時携帯された端末を取り巻く日常的な視聴空間とは限らず、仮設のスクリーンに媒介された、より短命な出来事(=仮設文化)でありうる。そこで最後に、おぼろげな出来事を体験した人びとの、かたちのない現実を実証的に記述していくための具体的な手法を検討したい(→4章)。

2. メディア・イベント研究の系譜

吉見俊哉は1993年、「メディア・イベント」という概念の重層的意味を、【1】新聞社や放送局などのマスメディア企業体によって企画され、演出されるイベント、【2】マスメディアによって大規模に中継され、報道されるイベント、【3】マスメディアによってイベント化された社会的事件=出来事、と分節化している(吉見1993; 吉見1996)。この整理は後続の研究で頻繁に援用され、日本におけるメディア・イベント概念を決定付けた⁶⁾。

それに先立って、吉見は1990年、「大正期におけるメディア・イベントの形成と中産階級のユートピアとしての郊外」と題する論文の中で、電鉄資本と新聞社資本によって演出された「メディア・イベント」としての博覧会を分析している。「新聞社というマス・メディアと博覧会というマス・イベントの結びつき」(吉見1990: 146)を明示的に表す概念として、「メディア・イベント」という言葉をいち早く、【1】の意味で用いていたのである。それに対して、【2】は言うまでもなく、ダヤーンとカツの概念を意味する。ダニエル・ブーアスティンの擬似イベント論やギー・ドゥボールのスペクタクル論などを踏まえてさらに拡張された【3】の意味は、1995年のオウム真理教事件などを経て、「劇場型社会」といった議論にも継承されていく⁷⁾。

日本では90年代から【1】の意味に重点を置いた実証研究に厚みがあった。それは「新聞事業史研究会」などを母体として、1991年に始まった「マス・

メディア事業史研究会」（その後、「メディア・イベント史研究会」に改称）の活動（津金澤編 1996；津金澤・有山編 1998；津金澤編 2002）に拠るところが大きい。明治以降，新聞社や放送局が主催または共催するスポーツ大会，博覧会や展覧会，音楽会や講演会などの催し物，さらには社会福祉や研究助成などを含む事業活動が，紙面を通じた言論・表現活動と並んで，いかに重要な社会的役割を果たしてきたかが，今日まで多様な事例研究にもとづいて実証されている。一連の事業活動は日本特有のかたちで展開され，こうした問題関心の萌芽は1970年代まで遡ることができるという（津金澤編 1996：iii-v）。このような「日本型」メディア・イベント研究の知見は，メディア研究のみならず，日本の近現代史や美術史，観光学や歴史地理学などにも貢献した⁸⁾。その一方，吉田光邦を中心として1980年前後に始まった「万国博覧会研究会」（吉田 1985；吉田編 1986），その成果を批判的に継承した『博覧会の政治学』（吉見 1992→2010）に連なる博覧会研究の系譜がこれに隣接している。

これらは「創られた伝統」（Hobsbawm and Ranger eds 1983=92）や「柔らかいファシズム」（Grazia 1981=89）などの研究動向とも結びつき，【1】の意味でのメディア・イベントの産業的基盤が戦前期から形成されてきた過程，および戦中期の戦争宣伝事業との関係などについて，今日まで多くの知見が蓄積されてきた。また，マスメディアとスポーツイベントの関係に対する関心も高い。大正末期以降における読売新聞の事業戦略が，読売巨人軍の創設とプロ野球リーグの創設につながり，正力松太郎による日本テレビ設立にもなって，戦後の日本社会にプロ野球中継が根付いていったことは広く知られている。

もっとも，【2】や【3】の視点と通底する先駆的研究も存在する。たとえば，ジャーナリストの筑紫哲也は1980年，アメリカ大統領選挙に関するテレビ報道を分析する中で，「メディアがとびついてくれるようなイベントをいかに作り出すかが，選挙運動の眼目になる」として，これを選挙の「メディア・

イベント」化と呼んでいる（筑紫 1980：130）。早川善治郎は1988年，プロレスの実況中継，皇太子成婚パレード，東京オリンピックを経て，安田講堂や浅間山荘の現場中継に至るまで，戦後日本のテレビ報道を「イベント・メディア化」の過程と捉えた（早川 1988）。テレビ普及期と重なった1959年の皇太子成婚報道，特に4月10日の成婚パレード中継が，1953年のエリザベス女王戴冠式における儀礼の演出と中継の手法を部分的に踏まえているとされ，【2】の意味でのメディア・イベントの代表例として頻繁に言及される。1964年の東京オリンピックに関しても，メディア・イベントとしての特性が多角的な視点から検証されてきた。

そして，1988年9月に始まった昭和天皇の病状報道，翌年1月7日の天皇崩御にともなう皇室報道は，まさしくこうした意味でのメディア・イベントに他ならなかった。竹下俊郎は1989年，「メディア・イベントとしての天皇報道—大学生調査の結果から」と題する研究報告をおこなっている（竹下 1989）。また，栗原彬を中心とする共同調査研究の一環として，吉見らは天皇の崩御当日から一週間，皇居前広場で記者に対する聞き取り調査をおこない，〈天皇の死〉において，テレビが果たした決定的に重要な役割に関心を向けた。天皇を見た，あるいは迎えたという戦争体験世代の記憶が，マスメディアの報道によって反復的に再生されていった反面，若い世代にとっての天皇は「テレビに出ている人」であり，記帳の動機をもっぱら「世紀のイヴェント」への参加として語ったという⁹⁾。また，1993年の皇太子婚約報道および成婚報道に関しては，当時から明確にメディア・イベントとしての社会的意味が検討されていた（川上 1994）。

吉見が強調しているように，【1】～【3】の三層は本来，「別々の研究領域として分離してしまうのではなく，互いに密接に結びついた全体的な過程として把握すること」が重要だが，日本において歴史研究に傾斜しているという事実は，「欧米における文化の階級社会的な構成と，日本における文化の大

衆社会的な構成の違いが、メディアとイベントの関係に異なる仕方で作動した⁹⁾帰結と考えられる(吉見 1996: 26-7)。しかし裏を返せば、歴史的な視点にもとづく社会的構成の違いはたしかに重要だが¹⁰⁾、国際化と情報化にともなうメディア・イベントの今日の変容を同時代的に分析しようとする研究が——2002年の日韓共催 W 杯に関する考察¹¹⁾を最後に——停滞していることも否定できない。

3. メディア・イベントの文化人類学

3.1 〈動員／抵抗〉という尺度

新聞社や放送局が主導するメディア・イベントが、読者や視聴者に働きかけて大衆動員を実現する手法、あるいはナショナリズムを高揚する手段として採用されたことと結論付ける事例研究は枚挙に暇がない。メディア・イベントは、人びとに強烈な共有体験をもたらし、「われわれ」としての集合的記憶を強化するとともに、他者との境界を確認させる作用も繰り返し指摘されてきた。

逆に、こうした権力的作用に対して、受け手による抵抗の契機を積極的に見出そうとする視点もある。たとえば、既に述べた皇室報道の視聴行動に関しては、読みの多様性に焦点を当てた研究が散見される。吉見は、1959年の皇太子成婚イベントについて、高橋徹らが当時おこなった調査(高橋ほか 1959)などを手がかりに、その送り手と受け手の両面から検証している。その結果、全国一斉的な報道にも関わらず、実際の受容のされ方は差異を含んでおり、決して一枚岩ではなかったことを裏付けている(吉見 2002)。また川上善郎は、1993年の皇太子結婚報道に関して、大学生を対象とする調査にもとづいて、このメディア・イベントに積極的に関わったのは明らかに女性であり、「奉祝一色」の視聴者と「メディア批判」の醒めた視聴者に二極化していたことを明らかにしている(川上 1994)。

それでも、イギリスのテレビ研究における「能動的な視聴者(active audience)」論などが強調してき

たように、受け手の主体性や能動性の度合いを実証的に考察し、メディア・イベントの重層的な構成を明らかにするような議論は、これまでごく一部に限られていたと言わざるを得ない¹²⁾。

ダヤーンとカツが著書の冒頭、「私たちは、ダニエル・ブーアスティンよりも、ジョルゲ・モッセに、より多くの注意を払っている」(Dayan and Katz 1992=96: 8)と述べていることを看過してはならない。モッセによれば、ナチ政権は、ベルサイユ条約下の経済的困窮のみを根拠に出現したのではなく、19世紀以前からドイツ地域に存在した諸々の文化運動にこそ、その芽があったという。ドイツ体操運動(Turnen)をはじめとして、男子合唱団、射撃協会、モダン・ダンサーたちが大衆運動の担い手となり、国民的記念碑に代表される祝祭空間において、政治的祭祀を実行していったというのである。国家的な儀礼秩序の中に運動する身体が動員され、大衆の国民化が遂行していく(Mosse 1975=96)。日本において、モッセに直接言及しているメディア・イベント研究はきわめて少ないにも関わらず、多くの事例分析が図らずも、その歴史観を反復しているかのようである。

しかし吉見は、モッセの議論がスポーツとナショナリズムの関係を儀礼論的な視角から捉え返していく可能性を示しながらも、あくまで体操運動家や政策決定者の演出の側の分析にとどまっている点を批判している。そうした演出を果たして大衆が完璧に受け止め、国民化され得たのだろうか。儀礼秩序にもとづく国民化の過程を、より重層的で矛盾を孕んだものとして捉えるための視座として、吉見はデ・グラツィアの「柔らかいファシズム」論を挙げている(吉見 1999)。

このような視座自体は90年代以降、日本においても次第に共有されるようになっていく。戦時期の日本思想を対象とする研究領域においては80年代まで、文化人が翼賛体制に積極的にのめりこんでいった事実を処断する視点が優勢であった。赤澤史朗や北河賢三らは、こうした視点に立つ研究が、戦時下の文

化の「不毛」性を自明の前提としていることを批判したうえで、戦前から戦中の時期が単なる「暗い谷間」の時代だったのではなく、さまざまな領域で文化創造の営みがあり、一定の成熟がみられたことに注目している。日中戦争以降の時代が、あたかも灰色一色で覆われた「暗い谷間」のように見えて、しかし文化創造の「ジャンルや抵抗の形態によっては、『国策協力』のタテマエの下で、ある種の抵抗をおこなうことが可能な時期もあれば、もはやその形態での抵抗は不可能となる時期もあった」（赤澤・北河 1993: 7）。こうした視点を踏まえて、戦時期のイベントと大衆動員の関係に着目する有山輝雄は、国家統制と自主性擁護の対抗軸のみならず、その相乗的増幅という基軸を提示している。

上からの国家統制と下からの自主的動向とは、対抗しあうこともあったが、また相乗的にはたらき、互いに相手と自己を増幅していった。人工的出来事であるイベントは、われわれがみたい夢、われわれが実現したい欲望の産物である。戦時期といえども、「欲しがりません勝つまでは」の禁欲主義がすべてをおおったわけではなく、様々な欲望・願望が人々を動かしていたはずである。そうした欲望・願望は、ときに統制と対抗することもあったであろうが、また統制への自主的な協調を促し、結果的に統制を一層強大なものにしていくこともあった。（津金澤・有山 1998: ix）

それでも、大衆動員という権力的作用を主題化した上で、受け手の主体性や能動性の度合いをいかに精緻に読み解いても、結局は動員／抵抗という二項対立に回収されてしまうのではないか。果たしてメディア・イベントの社会的機能の豊穡さ、特に参加者の雑種性や複数性、あるいは流動性を、この一元的な尺度だけで測ることができるだろうか。

「たとえ、政治的セレモニーが社会を自己崇拜へと誘うことに注意せよ、とモッセが警告しているにしても」、ダヤーンらはメディア・イベントに対し

て、【1】ポストモダン状況における有機的結束の基盤となる、【2】社会を映し出す機能を持つ、【3】統一性だけでなく多元主義を賞揚するといった理由から、「無批判的ではないが、暗に擁護する立場」を示している（Dayan and Katz 1992=96: 9-10）。この微妙な立ち位置の含意を、われわれはいま一度、注意深く検討する必要があるのではないだろうか。

3.2 〈真正さの水準〉という尺度

メディア・イベント研究においては、参加する人びとのアイデンティティ形成の捉え方がしばしば問題になる。この点について、文化人類学における議論を補助線に、若干の考察を加えたい。

レヴィ＝ストロースが〈真正さの水準〉と呼ぶ社会様式の区別を踏まえて、文化人類学者の小田亮は、人びとのアイデンティティ形成のあり方は、「真正な社会」／「非真正な社会」という、社会に対する想像の仕方の違いと深く結びついているという（小田 2006: 26-31）。

レヴィ＝ストロースによれば、「非真正な社会」においては、国民国家や民族集団、あるいは神の目線といった単一の基準から、人びとが直接的に結び付けられる。固定的なアイデンティティを受け入れた上で、全体が体系的に想像されるかたちで、他者との社会関係が形成される。人と人との相互作用を抜きにして、全体と個人がいきなり結び付けられるのである。ネイションという「想像の共同体」に顕著に見られる想像の仕方である。

これに対して「真正な社会」とは、顔の見える諸個人の具体的なつながりを延長していくことでおぼろげに想像される、明確な境界のない社会様式である。また、全体を通して諸個人が統制されないために、人びとのアイデンティティは均質に形成されない（Lévi-Strauss 1958=72）。

真正さの水準は、社会を構成する集団の規模で決まるわけではない。たとえば国民国家の中の民族集団のように、小規模であっても非真正な社会の想像の仕方は存在する。逆に、人と人との直接的な関係

を延長して、ある民族のまとまりが浮かび上がるような、真正な社会の想像の仕方も存在するだろう。小田によれば、「真正さの水準とは、法や貨幣やメディアに媒介された間接的で一元的なコミュニケーションと、身体的な相互性を含む〈顔〉のみえる関係における多元的なコミュニケーションの質の違い」に過ぎない(小田 2006: 27-28)。

ある集合行為を、権力によって支配された動員とみなすことも、支配的権力に対する抵抗とみなすことも、結局は非真正であることを前提として社会を想像した結果、生まれる解釈に過ぎない。このような解釈からは、さまざまな人びとが相互作用によってその場を構成し、行動しているという可能性が、あらかじめ抜け落ちてしまう。メディア・イベントの解釈もまた、〈動員／抵抗〉論のアプローチにとどまらず、参加者同士の水平性を注視することで、〈真正さの水準〉という尺度を手放さないことが重要であろう。

2006年ドイツ W 杯のファンマイルでは、政治犯やフーリガンによる破壊行動などが起こらず、外国人観光客とも友好的な雰囲気が保たれた。ドイツのスポーツ社会学者ハンス＝ユルゲン・シュルケはベンヤミンを引用し、ファンマイルによって「ファンと遊歩者フラインナーがひとつになった」と捉えている(Schulke 2007)。すなわち、スクリーンに媒介された人びとの集合行為を、特定の嗜好性に支えられた趣味集団の実践としてあらかじめ境界付けるのではなく、逆に境界を曖昧化させる出来事として捉え直す余地を残しておきたい。

こうした視座は、いわゆる「集合的アイデンティティ」の概念に通じる。アルベルト・メルッチが指摘するように、現代の集合行為には、人びとの共通体験によって共有された意識を通じてこそ、その集団を想像する方法が初めて見出されるのである(Melucci 1989=97)。

4. メディア・イベントの空間論

4.1 複合メディア環境における媒介作用

ここまで述べてきたように、日本では事業史を中心とした歴史研究に厚みがある反面、イベントが遂行される現場を描写する方法論、そしてマスメディアに媒介されたイベントの受容過程に関する追究が乏しい。

イギリスのメディア研究においては、テレビ受像機が置かれた空間を微細に描くために、リビングにおける「オーディエンス・エスノグラフィ(audience ethnography)」が洗練されてきた。それに対して、アメリカのアンナ・マッカーシーは、家庭外の公的な場所に設置された受像機を取り巻く視聴空間を丹念に記述している(McCarthy 2001)。こうしたエスノグラフィックな調査手法はこれまで、メディア・イベント研究の系譜と十分に接ぎ木されていない。

ただし、光岡寿郎が指摘するように、テレビの「場所固有性(site-specificity)」を描いたマッカーシーは、視聴空間における家庭の優越性を解除し、公的空間を分析の射程に収めることには成功したが、視聴者の身体は結局、受像機の前に置き去りにされたままであった(光岡 2015)。冒頭で述べたように、今日のメディア・イベント研究においても、インターネットの普及にとまなう複合的なメディア環境の特性——携帯電話(スマートフォン)やソーシャルメディアに媒介された視聴者の情報行動など——を踏まえた分析が不可欠である。

ファンマイルにおいて、若者たちは肩を組んで歌い、ステージ上の MC にあわせて一緒に踊る。彼らが共に歌い、踊ることができるのも、サッカーファンであるかどうかに関わらず、連日ラジオから流れる歌を聴き、ネットで振付を予習していたからだ。ダナ・ボイドが指摘するように、かつての若者たちがテレビを消費することによって連帯を感じる事ができたように、現代ではソーシャルメディアによ

って、集合的な想像の共同体の一部として自己同定されうる。「ネットワーク化されたパブリックは、空間的な意味と想像の共同体の意味，両方の意味においてパブリックである」（boyd 2014=14: 21）。

伊藤昌亮はかつて、ダヤーンらのメディア・イベント概念がヴィクター・ターナーの儀礼論に依拠している点と、巨大電子掲示板2ちゃんねるに媒介される利用者のパフォーマンスもまた、ターナーの議論に即してその構造と意味を把握できる事例が存在している点を梃子に、ネット文化にメディア・イベント概念を拡張した議論を展開している（伊藤2006）。だが、ネット文化研究の知見を踏まえた、本格的な理論構築はこれからの課題といえよう。

4.2 〈仮設文化〉へのまなざし

メディア・イベントが受容されるのは、据え付けられた受像機を取り巻く日常的な視聴空間とは限らない。「いつもそこにある」（＝都市に常設されたスクリーンの遍在性）あるいは「いつも持っている」（＝人びとが携帯する端末の常時接続性）という恒常性に支えられた視聴空間でさえないかもしれない。パブリック・ビューイングのように、仮設のスクリーンに媒介された視聴行動は、オーディエンス・エスノグラフィの手法で捉えることが特に難しい。

「仮設」という言葉は一般的に、建築デザインの領域で用いられているが、これは「イベント」という概念と無関係ではない。たとえば、大阪万博で広く知られるようになった「パビリオン (pavilion)」は元来、大型テントなどの仮設建築物を意味する。

仮設の舞台に支えられたイベントには、おのずと祝祭的な非日常性がともなう。建築史家の西和夫は、神社の境内で披露される伝統芸能の舞台が、祭礼の時にだけ組み立てられる仮設物であることに着目し、その理由として祭礼の非日常性をたびたび強調している。たとえば神楽では、演者が現世から離れて一時的に変身を遂げるため、一時的な舞台が必要というのである（西ほか 1997: 152-153）。史料から推測することしかできないが、鎌倉時代の初期には既に、

現代まで引き継がれる仮設の能舞台が存在していたと考えられるという（同: 114-127）。

さらに、仮設建築物が帯びる性質として、ロバート・クロネンバーグは「エフェメラル (ephemeral)」, つまり短命であることを指摘している（Kronenburg 1995=2000: 12）。イベントの舞台となる仮設建築物は、恒久的に特定の場所に残り続けることで、新たなイベントを創発する媒介になる記念碑などは、きわめて対照的である。「ものづくりの分野では、場所の意味を獲得する方法は、ある恒久的なものを建てること」（同: 161）なので、仮設建築物は軽視されがちである。

仮設建築物に媒介される文化には、その短命さゆえに、いっそう祝祭的な特質が宿る。こうした視座を発展させて、文化人類学者の山口昌男は、バブル崩壊後、制度の安定性や恒常性が急速に後退した文化現象を捉える上で、「仮設性」という概念に着目している。

文化とはもともと仮設的・仮構的（エフェメラル）な部分から積み上げられてきたものなのである。恒常的で安定していると思われていたものが行き詰まった時にすべきことは、この文化の仮設的な部分、つまりシステムの外側で辺境性と先端性を両立させてきたエフェメラルな部分にもう一度立ち返ることではないだろうか。（山口 1999: 5）

このように山口は、「仮設性」を「恒常性」と対比させている。これを受けて室井尚は、「人間の作り出すものに永遠に続く恒常的なものなどあるはずがない。だが、比較的安定したままシステムがしばらく持続するとそれが恒常的で安定したものであるかのように見なされていく」と指摘する（室井2000: 17）。たとえば家庭で聴取されるラジオの延長線上に、国家的にも産業的にも枠付けられた戦後のテレビ放送は、恒常的で安定した（ようにみえる）システムの好例といえよう。新聞社や放送局による事業活動に焦点を当ててきたメディア・イベン

ト研究は、日本のマスメディアが恒常的なシステムとして社会化していく過程を描いてきたともいえる。しかしながら、

山口が言う仮設性=エフェメリティとは、戦後日本が作り上げて来た疑似-恒常的なシステムの「儚さ」=エフェメリティと表裏一体なのである。エフェメリティとは元々たった一日しか生きられない蜂蟬の命を指した言葉であるし、単なる仮設建築物ならば、むしろ“Temporal Construction”とかの言葉の方が適しているだろう。つまり、儚くも消え去った過去のシステムを惜しむのではなく、その「儚さ」こそを文化的想像力の源と見る逆転した視点を取ることによって、山口はもう一度文化の中にダイナミズムを取り戻そうとしているのである。(同: 18-19)

パブリック・ビューイングは、家庭内視聴の恒常性とは対照的に、仮設されたスクリーンに媒介され、ごく限られた時間のみ、その場限りの出来事として受容される。それは常設のスタジアムで試合を観戦できなかったサッカーファンたちが、仕方なく参加するものであるかのように誤解されるかもしれない。しかし既に述べたように、それは熱心なファンのた

めだけの催しではなく、逆に趣味集団の境界を曖昧化させる出来事として、より多くの人びとに経験される。こうした〈仮設文化〉の空間性を、具体的かつ実証的に記述していくことが不可欠である。

4.3 〈仮設文化〉の人類学に向けて

アーカイブが体系的に残されない短命な文化現象に関しては、とりわけ、おぼろげな出来事を体験した人びとの、かたちのない現実を読み取っていくために、質的調査の方法論が模索され続けている。エスノメソドロジー (ethnomethodology) のように、日々の生活の中で人びとが実践する知に学ぼうとする試みもある。

著者のひとりとはこれまで、日本とドイツにおいて、パブリック・ビューイングに参加した経験を持つ人びとに対して、個別に半構造化面接をおこなってきた。その上で、データの個別性を重視しつつ、一般的理論化を試みる「グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach: GTA)」を用いた分析に取り組んでいる。さらに、デザイン工学やユーザビリティ研究などで使われている手法をオーディエンス分析に援用し、図1に示す通り、分析プロセスをチャートに落とし込み、可視化しながら知見の集積を続けている。その結果、日本とドイ

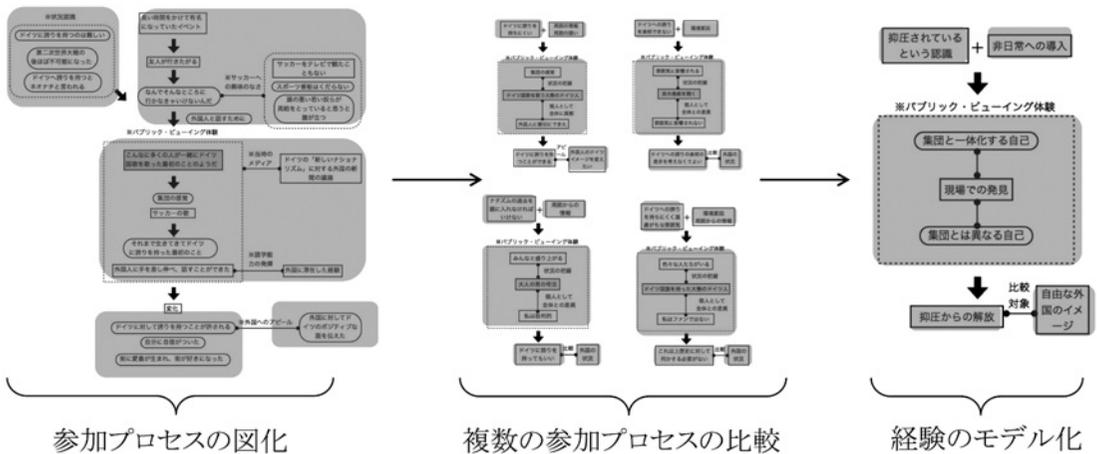


図1 GTAによるインタビューデータの分析プロセス (筆者作成)

ツには第二次世界大戦後，ナショナル・アイデンティティの表明に対する抵抗感が社会的に共有されてきたという大きな共通点がありながら，参加者のアイデンティティ形成の仕方に有意な差異があることが明らかになっている（西尾 2013；立石 2014）。

GTAは，人がものごとを見る位置によって情報が変わってくる，いわゆる視差（parallax）の存在を前提とした方法論であり，ある集団の特性を外側から測定するのではなく，人びとの経験する現実を内側から捉えることを目指す。人びとの体験を構築する諸要素の関係性と，そうした体験の集積同士の関係性から，全体の構造を帰納的に描写する——〈真正さの水準〉という尺度に即した——方法論のひとつといえよう¹³⁾。

〈仮設文化〉の人類学に向けて，質的調査の方法論を比較検討するだけの紙幅は残されていないが，本稿で提示した視座にもとづく事例研究の蓄積を含めて，今後の課題としたい。

謝辞

本稿は，財団法人電気通信普及財団「パブリック・ビューイングの日独比較研究—複合メディア環境における「メディア・イベント」に関する理論構築に向けて」（研究代表者：立石祥子）の助成を受けた研究成果の一部である。

注釈

- 1) 『日経MJ（流通新聞）』2013年12月18日号「映画館でコンサート！ライブビューイング拡大，LVJ，市場けん引，音響良く半額程度，年間動員100万人目標。」
- 2) NHK総合『クローズアップ現代』2011年3月10日放送「テレビはいらない?!—急成長するインターネット放送」 http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail_3016.html
- 3) 『朝日新聞』2014年4月29日号「ニコ動で楽しむ伝統文化 相撲・将棋，盛り上がる中継」
- 4) 2013年4月に開催された「ニコニコ超会議2」において，自衛隊ブースを訪れた安倍晋三首相が迷彩服を着て，展示されていた最新型「10式戦車」の砲手席に立ったことは，国内外で大きく報じられた。たとえば，イギリスの*Financial Times*紙は「首相は国家主義的な傾向を隠さなかった」と厳しく論評している。<http://www.ft.com/intl/cms/s/0/b65cb4aa-afe5-11e2-acf9-00144feabdc0.html>
- 5) フジ・ロック・フェスティバルは90年代，無謀な若者たちが暴走する「悪夢のイベント」として新聞や週刊誌などでバッシングされていた。1997年，富士山麓で開催された第1回フジ・ロックは，開催初日に会場区域が台風の直撃に遭い，病人や負傷者が続出したことも相まって，2日目は中止を余儀なくされる。翌年，お台場に会場を移した第2回フジ・ロックでは，猛暑の中，熱中症等で気分が悪くなる観客が相次いだことがセンセーショナルに報じられた。こうした惨状を踏まえて，気軽にライブハウスに出かけるのとは異なる気構えと行動様式が要求されることが認識される。来場者には山に対する知識が求められ，夏フェスを新しいレジャーないしアウトドアとして捉える機運が高まった（岡田 2003；永井 2014）。
- 6) 吉見（1993）は，人類学的儀礼理論とメディア論との接合に強い関心を向けているが，吉見（1996）ではむしろ，人類学的儀礼理論を現代の文化現象に適用していくことの限界が強調されている。メディア・イベント概念の定義として頻繁に引用される（＝インパクト・ファクターが高い）のは，圧倒的に後者の論文である。
- 7) 2000年に刊行された『現代のエスプリ』400号「特集：劇場型社会」などを参照。
- 8) 河原（2001）は，こうしたメディア・イベント概念を補助線に，日本の美術展覧会システムの形成過程を詳細に考察している。
- 9) 「葬列は，沿道の人びとに向けてよりも，テレビ・カメラに向けて演出されていた。そして一月の皇居前での記帳そのものも，全体がテレビ・カメラに向けて演じられたショーであったと考えられないこともない。われわれが聞き取りをした記帳者たちも，しばしばわれわれを新聞記者のようになして「告白」ないし「演技」のパフォーマンスを行なっていた[···]〈天皇の死〉にある社会的なかたちを与えていったのは，天皇自身のま

なざしでも、記者や沿道の観客のまなざしでもなく、最終的には無数の見えないテレビ・カメラのまなざしであったのかもしれない(吉見・内田・三浦 1992: 56-7)。

- 10) 吉見は、ダヤンらの分析を「現時点でのメディア・イベントの形式的特性を素描することに終始しており、それぞれのイベントのリアリティ構成や歴史的形成を明らかにしようとはしていない」と批判し、「こうした経験主義的で非歴史的な研究を超えて、より批判理論的かつ歴史的なメディア・イベント研究に向かっていく必要がある」と述べている(吉見 1993: 24)。
- 11) 2003年に刊行された『マス・コミュニケーション研究』62号「特集：メディアイベントとしてのスポーツ」などを参照。
- 12) ファン・中村(2003)は、2002年W杯に関するメディア言説を解明するために、地上波放送の試合中継、関連番組の編成、ワイドショーの分析、および新聞の社説欄と投稿欄の論調の差異を分析しているが、「意味解釈のポリテクス」については、その可能性を指摘するにとどまっている。また、貞包(2006)は、メディア・イベントにおける受け手の「読み」の多様性に注目しているが、サッカー国際試合の中継番組を留学生に集団視聴してもらい、参与観察やインタビューをおこなうという調査手法にとどまっている。すなわち、あくまで人工的な状況下におけるメディア・テキストの解釈が分析されている。今日では、スポーツのテレビ中継が無条件で「メディア・イベント」と呼ばれることもあれば、何らかのイベントがおこなわれる空間自体を指すという拡大解釈まで散見される。メディア・ミックスと同じ意味合いで用いられることも珍しくない。こうした概念の揺らぎもまた、メディア・イベント研究の課題のひとつといえよう。メディア・イベント概念の範疇については、巫(2009)が詳細に検討している。
- 13) 要素と要素の関係から成る全体、という社会の想像の仕方は近年、領域を越えて注目されるようになってきている。たとえば「ディスポジション(disposition)」という概念もその一つである。ディスポジションの概念は、世界を諸要素の「配置」として捉えるもので、人間を含む諸要素は互

いの配置によって絶えず態勢づけられている(disposed)と考えられる。哲学者の柳澤田実はこの概念を駆使して、宗教や美術、建築などの営みを領域横断的に捉え直すことを試みている(柳澤編 2008)。

参考文献

- 赤澤史朗・北河賢三編(1993)『文化とファシズム—戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社
- boyd, danah (2014=14) *it's complicated: the social lives of networked teens* = 『つながりっぱなしの日常を生きる—ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』野中モモ訳、草思社
- 筑紫哲也(1980)「80年代米大統領への道—“メディア・イベント”の虚と実」『潮』254号
- Dayan, Daniel and Elihu Katz (1992=96) *Media Events: The Live Broadcasting of History*, Harvard University Press = 『メディア・イベント—歴史をつくるメディア・セレモニー』浅見克彦訳、青弓社
- 古川隆久(1998)『皇紀・万博・オリンピック—皇室ブランドと経済発展』中公新書
- Grazia, Victoria de (1981=89) *The Culture of Consent: Mass Organization of Leisure in Fascist Italy*, Cambridge University Press = 『柔らかないファシズム—イタリア・ファシズムと余暇の組織化』豊下橋彦・高橋進・後房雄・森川貞雄訳、有斐閣選書
- 早川善治郎(1988)「テレビ報道の軌跡—イベント・メディアへの転身の経緯を中心に」田野崎昭夫・広瀬英彦・林茂樹編『現代社会とコミュニケーションの理論』勁草書房
- Hobsbawm, Eric and Telence Ranger (eds) (1983=92) *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press = 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭ほか訳、紀伊國屋書店
- ファン・ソンビン・中村綾(2003)「2002 W杯とメディア言説—テレビと新聞はW杯をどのように伝えたか」『立命館産業社会論集』39巻1号
- 伊藤昌亮(2006)「オンラインメディアイベントとマスメディア—2ちゃんねる・24時間マラソン監視オフの内容分析から」『社会情報学研究』10巻2

- 号
- 河原啓子 (2001) 『芸術受容の近代的パラダイム—日本における見る欲望と価値観の形成』美術出版社
- 川上善郎 (1994) 「メディア・イベントの視聴構造—「結婚の儀報道」をめぐる」『生活科学研究』16巻
- 香山リカ (2002) 『おちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義』中公新書ラクレ
- 貞包みゆき (2006) 「メディア・イベントの受け手の「読み」」『リテラシーズ』2号
- Kronenburg, Robert (1995=2000) *Houses in Motion: The Genesis, History and Development of the Portable Building*, St. Martin's Press = 『動く家—ポータブル・ビルディングの歴史』牧紀男訳，鹿島出版会
- Lévi-Strauss, Claude (1958=72) *Anthropologie Structurale* = 『構造人類学』荒井幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫訳，みすず書房
- McCarthy, Anne (2001) *Ambient Television: Visual Culture and Public Space*, Duke University Press
- Melucci, Alberto (1989=97) *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press = 『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳，岩波書店
- 光岡寿郎 (2015) 「メディア研究における空間論の系譜—移動する視聴者をめぐって」『コミュニケーション科学』41号
- Mosse, George L. (1975=96) *The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany, from the Napoleonic Wars Through the Third Reich*, Howard Fertig = 『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』佐藤卓己・佐藤八寿子訳，柏書房
- 室井尚 (2000) 「仮設性と記号論の旅'99—札幌とドレスデン」日本記号学会編『文化の仮設性—建築からマンガまで（記号学研究20）』東海大学出版会
- 永井純一 (2014) 「ツーリズムとしての音楽フェス—「みる」から「いる」へ」遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人編『観光メディア論』ナカニシヤ出版
- 西和夫・神奈川大学建築史研究室 (1997) 『祝祭の仮設舞台—神楽と能の組立て劇場』彰国社
- 西尾祥子 (2013) 「ドイツにおけるパブリック・ビューイング体験に関する考察—アイデンティティの行方をめぐって」『情報文化学会誌』20巻1号
- 小田亮 (2006) 『レヴィ=ストロース入門』ちくま新書
- 岡田宏介 (2003) 「イベントの成立，ポピュラー文化の生産—「(悪) 夢のロック・フェスティバル」への動員はいかにして可能か」東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし—売る・読む・楽しむ』勁草書房
- Schulke, Hans-Jürgen (2007) “Fan und Flaneur: Public Viewing bei der FIFA-Weltmeisterschaft 2006 – Organisatorische Erfahrungen, soziologische Begründungen und politische Steuerung bei einem neuen Kulturgut”, Dieter H. Jütting, (hrsg) *Die Welt ist wieder heimgekehrt: Studien zur Evaluation der FIFA-WM 2006*, Waxmann
- 高橋徹ほか (1959) 「テレビと〈孤独な群衆〉—皇太子ご結婚報道についての東大・新聞研究所調査報告」『放送と宣伝』1959年6月号
- 竹下俊郎 (1989) 「メディア・イベントとしての天皇報道—大学生調査の結果から（現代語・現代文化学系研究会4月例会）」『言語文化論集』30号
- 立石祥子 (2014) 「日本型パブリック・ビューイング文化の成立—2002年サッカーW杯におけるオーディエンス経験から」『情報文化学会誌』21巻2号
- 津金澤聰廣編 (1996) 『近代日本のメディア・イベント』同文館
- 津金澤聰廣・有山輝雄編 (1998) 『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- 津金澤聰廣編 (2002) 『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社
- 巫坤達 (2009) 「メディア・イベント論の再構築」『応用社会学研究』51号
- 山口昌男 (1999) 「序文—文化の仮設性と記号学」日本記号学会編『ナショナリズム／グローバリゼーション（記号学研究19）』東海大学出版会
- 柳澤田実編 (2008) 『ディスプレイ—配置としての世界』現代企画室
- 吉田光邦 (1985) 『改訂版 万国博覧会—技術文明的史的

に』NHKブックス
吉田光邦編（1985）『図説万国博覧会史—1851-1942』
思文閣出版
吉田光邦編（1986）『万国博覧会の研究』思文閣出版
吉見俊哉（1990）「大正期におけるメディア・イベン
トの形成と中産階級のユートピアとしての郊外」
『東京大学新聞研究所紀要』41号
吉見俊哉（1992→2010）『博覧会の政治学—まなざし
の近代』講談社学術文庫
吉見俊哉・内田八州成・三浦伸也（1992）「〈天皇の
死〉と記帳する人びと」栗原彬・杉山光信・吉見

俊哉編『記録・天皇の死』筑摩書房
吉見俊哉（1993）「メディアのなかの祝祭—メディア・
イベント研究のために」『情況』1993年7月号
吉見俊哉（1996）「メディア・イベント概念の諸相」津
金澤編，前掲書
吉見俊哉（1999）「ナショナリズムとスポーツ」井上
俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のため
に』世界思想社
吉見俊哉（2002）「メディア・イベントとしての「御成
婚」」津金澤編，前掲書

The Theoretical Range of “Media Events” Concepts
in Multimedia Environments :
Toward the Anthropology of Ephemeral Culture

IIDA Yutaka ⁱ, TATEISHI Shoko ⁱⁱ

Abstract : Screen-mediated collective action is widely popular today and includes public viewings and live viewings. Still, the fact remains that there is deep-rooted criticism concerning the “collective effervescence” of audience members. In this study, we aimed to examine the theoretical potential of “media events,” with the aim of empirically understanding the social function of this cultural phenomenon.

By genealogically tracing media events studies in Japan, we found that there is a wealth of historical studies on the topic, but on the other hand, there is a lack of contemporary studies on the influence of globalization and informatization. To begin a modern discussion of media events studies, we should take into account the characteristics of multimedia environments that include the popularization of the Internet and mobile media. At the same time, there are many case studies that regard media events as instruments for the mobilization of the masses. However, it is insufficient to describe audience subjectivity or activity empirically as a means to explain their multi-layered structure and the different measures resulting from the dichotomy between the mobilization and resistance models of thinking.

This study shows the way to achieve a theoretical restructuring of media events studies by using examples from anthropological interpretation. By paying close attention to the horizontal relationship between audience members, we can consider that collective action is not only an action of a hobby group supported by particular preferences, but also an event clouding the border of the social groups.

Media events are not accepted as an exclusively everyday viewing space on which permanent receivers or mobile devices focus on a daily basis. Instead, they are an “ephemeral culture.” With this in mind, the present study shows the efficacy of grounded theory approach analysis as one way to read the formless actuality through people’s indistinct experiences.

Keywords : media events, public viewing, television, ephemeral culture, anthropology

i Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

ii Research Fellow, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University